

旧軍用地転用建築をめぐる営みの研究

—首都圏における住宅・学校転用空間を事例として—

塚田修一^{※1} 後藤美緒^{※2} 松下優一^{※3}

概要

本研究は、首都圏における、旧軍用地を住宅および学校へと転用した空間を対象として、そこでの「(転用) 建築」という営みに注目し、戦後の住空間および学校空間の創出を考察する。2024 年度後半では、東京都武蔵野市の中島飛行機武蔵製作所跡が野球場および住空間へと転用される事例と、東京都北区において、旧軍用地が学校へと転用される事例を調査した。いずれも、旧軍用地であるがゆえの困難・弊害を何とか乗り越えていく営みが確認できるだけでなく、旧軍用地ならではの恩恵の享受（工場の地下インフラの再利用など）や、困難ゆえの住民の結束といった特長も見出すことができる。

研究背景と目的

本研究は、首都圏における、旧軍用地を住宅および学校へと転用した空間を対象として、そこでの「(転用) 建築」という営みに注目し、戦後の住空間および学校空間の創出を考察するものである。

本報告書では、①東京都武蔵野市における、中島飛行機武蔵製作所跡の転用事例、および②東京都北区における、旧軍用地の学校への転用事例を考察していく。

研究成果と考察 1：武蔵野市の事例

(1) 中島飛行機武蔵製作所の転用事例

1917 年、群馬県の太田に中島知久平が起した中島飛行機は、1924 年、杉並に東京工場を建設し、また日中戦争の拡大に伴い、1937 年に三鷹の地に、面積 20 万坪（66 万 m^2 ）という広大な土地に 550 万円という当時としては巨額な建設費を投じて建坪 3 万

6000 坪（12 万 m^2 ）の大工場を完成させる。

中島飛行機武蔵野製作所である。ここでは、陸軍の発動機を専門に製造した。

この陸軍専門の工場が海軍を刺激し、隣接地に海軍の発動機専門の工場を建造することになる。それが 1941 年に建造された中島飛行機多摩製作所である。土地の有効利用を考えて、1 万 6000 坪（5 万 3000 m^2 ）とし、鉄筋 3 階（一部 4 階）、地下 1 階の高層工場となった。その後、戦局の悪化に伴う、軍部からの増産の要求に応えるため、1943 年に武蔵野・多摩両工場を統合し、武蔵製作所が発足する（旧武蔵野製作所は東工場に、多摩製作所は西工場となる）。国内 25% の生産を占める日本一大発動機工場であり、徴用工や学徒動員で、4 万人が生産に従事した（富士重工業株式会社社史編纂委員会 1984）。

※1 相模女子大学 准教授

※2 相模女子大学 准教授

※3 法政大学 兼任講師

この中島飛行機武蔵製作所は、その規模の大きさゆえに、米軍の重点爆撃目標となり、9 回にわたる爆撃を受ける。死者 220 名、重軽傷者数千名に達し、建物・機械も大きく破壊され、壊滅状態で終戦を迎える。

本報告書で記述したいのは、戦後にこの廃墟に立ち上がった営みである。

便宜的に、工場の跡地を大きく 3 つのエリアに分けてみる。東工場のエリアは、戦後、野球場が作られ、ごく短期間稼働したあと、団地（公団緑町団地）となる。西工場のエリアは、戦後、駐留軍用住宅（グリーンパーク）が置かれた後、公園（武蔵野中央公園）となる。さらに工場から道路を挟んだ附属病院跡は、住宅地（都営関前住宅、のち八幡町）となる。

まずは東工場跡に短期間存在した野球場（東京スタジアムグリーンパーク球場）について考察していく。

（2）軍用地跡の「幻のスタジアム」

当スタジアムの収容人数は 51,000 人で、グラウンドは 4,410 坪（約 14,578 平方メートル）であり、当時の神宮球場（収容人数 58,000 人、グラウンド面積 4,111 坪＝13,590 平方メートル）と比べても見劣りしない規模の球場であった（沢柳 1946 : 140-141）。しかしながら、このスタジアムは、当時の試合観戦記では次のように酷評されている。

「ところが『店開き』したこの球場をひと眼みて失望した。グリーンパーク、つまり緑の園という名前からして、また「緑の大野球場」の宣伝文句から想像して、青々とした野趣満々たるフレッシュな球場を頭に描いてただけに「これは殺風景な」と思わず声を出したほどの意外さ。のつぺらぼうの『赤土の山』である。」（榎本 1951:58）

実際、後に見るように、この球場はごく

短命で終わった「幻の球場」であった。現在この球場が存在した場所には 1 枚のパネルのほかは、往時を偲ばせるものは何もない。そこで、この場所が球場であった頃のイメージをさらに具体化するために、この付近に居を構えていた小説家、英文学者の小沼丹による随筆を参照してみよう。

「球場はいつも閑散としてゐて、満員になったことは一度も無かつたらう。現に球場開きの時は、巨人・国鉄戦をやつたが観客は五分の入りと云ふところだつたと思ふ。巨人は与那嶺が入団した頃で、千葉、川上、青田、南村等がゐた。国鉄は若い投手の金田が投げたが、川上を三振に打取つたらマウンドの上で手を叩いて喜んだから可笑しかつた。」（小沼 2022 : 205-206）

この球場では、プロ野球の他に、大学野球の試合や高校野球の予選試合も行われたと小沼は書いている。

「この球場はプロ野球ばかりでなく、大学野球もやつた。当時は神宮球場は米軍のものになつてゐたから、先方の都合で使へない場合がある。そんなときはこの球場を用ゐた。（中略）それから、この球場では高校野球の予選の試合もやつた。夏の暑い盛りだから、麦藁帽子を被つて毎日のやうに観に行つた。下手糞な選手もあるが、それなりになかなか面白かつた。スタンドで球場関係者に会ふと、あの選手はどこそこの球団が眼を附けてゐましてね、なんて教へて呉れる。そんな話を聞くのも面白かつた。」

（小沼 2022 : 206）

そして近所の小沼も気付かぬうちに、この球場はその短い生涯を終えている。

「この球場の関係者には知合が多かつたから、内心応援していたが、どうも景気が宜しくなかつたらしい。知らぬ間に国鉄の二軍の練習場になつて、球場に足を運ぶこともなくなつて、どのくらゐ経つたかしら

ん？ 或るとき、気が附いたら球場は忽然と消えて、その跡に大きな団地が出来てみたから吃驚した。無論、いつの間にか引込線も消えてしまった。忽然と現れ忽然と消えたこの球場を、戯れに「幻の球場」と呼んでゐるが、偶に団地のなかを歩いてみても、建物も既に古びてゐて、曾てそこに大きな球場があつたことが夢か幻のやうに思はれる」(小沼 2022 : 206-207)。

(3) 旧軍用地の弊害と恩恵

当事例のように、軍需工場の跡を球場へと転用するケースは珍しい。実際、球場建造時には、空襲で破壊された軍需工場の跡ならではの苦勞が伴つたようである。ある雑誌記事は次のように書いている。

「とにかく蓮の穴みたいにボカンボカンと大きな爆弾の穴だらけで、おまけに中島時代の建物の基礎が地中深く埋没、基礎のコンクリートや鉄骨を掘出すだけでも大事業。弾痕もグラウンド敷地だけで八十発もあつたのだから、文字通り『穴埋め』もひと苦勞だつたらしい。さて整地した上にファン入口のトンネル建築をはじめると、ドカンと土地が陥没してやり直し、これはかくれた弾痕を知らなかつたため、そんな陥没事件も一再ではなかつた。」(榎本 1951:57)

だがその一方で、この球場は軍需工場跡であつたがゆえに成り立つたとも言える。

この球場は、地下排水設備ならびに夜間照明設備を備えていたが、それらは中島飛行機武蔵工場時代のインフラを再利用できたことによるという。

「地下には旧中島飛行機工場時代のメインパイプが無キズで残り、これはそつくりグラウンドの排水パイプに活用できたし、夜間照明のバック・ボーンであるケーブルだつて、大工場の跡でなければ埋没しているわけもなく、新たに相当な工費で引込まなければならぬところだつた。」(榎本

1951 : 57)

球場が消えた後、ここは日本住宅公団の緑町団地となる。グラウンドは周囲の地盤から 4.1 メートル掘り下げて作っていたため、団地になった際にも高低差として残つた。当時の緑町団地の配置図をみると、真ん中の楕円形部分にグラウンドの名残がある。これは基本的には現在も変わっていない。ここがかつて球場であつたことを示す、唯一の痕跡である。

(4) 旧軍用地を住空間にする営み

これら中島飛行機武蔵製作所の敷地から、現在の伏見通りを隔てた住宅地(八幡町)も、中島飛行機の附属病院の跡であり、旧軍用地であつた。これら軍需工場跡から住宅地へと作り変える営みを辿るのに参照するのが、脇坂勇による『八幡町ものがたり』である。脇坂は、高校生であつた 1949 年、中島飛行機附属病院跡に造られた応急住宅に家族で住むことになった。かつての関前住宅、現在の八幡町である。脇坂が記述した、旧軍用地跡を住空間にする営みを見ていく。

「当時のこの地域の地番は武蔵野市関前といい、都営関前住宅というのが正式な呼称であつた。全三百戸の起工が二十三年九月、竣工は翌年五月であつた。建設用地は旧中島飛行機製作所の武蔵野工場付属病院の跡地で、戦争中にあの名機といわれた戦闘機「隼」を生んだ中島製作所も、広い道路を隔てて隣接する付属病院も、爆撃によって破壊しつくされ、瓦礫で埋めつくされていたのだが、東京都は病院跡を地主から借地して応急住宅建設を計画したのである」(脇坂 1988 : 7-8)。

ここは、空襲によって空洞だらけだった地面を、粉碎された建物の残骸や瓦礫で埋め、その上に泥土をまぶして都営住宅を建てたため、住宅の入居者たちが、狭い庭で

【様式 2】

自家菜園を始めようとしても、埋蔵した瓦礫のせいで地面にシャベルを入れることさえできなかったほどであるという。ここでの新生活は、電気なし、ガスなし、水道なしの状態から始めなければならなかった。

だが、興味深いのは、ここでの生活の苦労が、住民たちの結束を促進したことである。関前住宅では、地域コミュニティの連帯と結束が早かったという。その理由を、脇坂は次のように説明する。

「まず、境遇が似ていた。戦災者か復員者か引揚げ者か、大ていの家族がそのうちのどれかであった。ホワイトカラー族が主で、経済水準、知的水準がほぼ一定していた。当面の生活を維持、あるいは改善していく上で、共通の問題をかかえていた。不便な交通機関、未整備の道路、防犯施設の不備、それに水道、ガス、下水、家屋の修繕や増改築にいたるまで、すぐにでも解決しなければならない問題が山積していた。各戸が勝手に手をつけることのできない問題ばかりである。」（脇坂 1988 : 49）

やがてこの住宅の住民たちは自治会である「都営関前住宅親和会」を組織し、住民が抱える問題を積極的に解決していく。

「親和会とその特別委がスタートしてから、ほぼ一年間のうちに、まずガスが開通し、ついで住宅内の泥道に砂利敷がほどこされ、住宅東南角に駐在所が設置され、停電対策として十二ヵ所の特設井戸が掘られ、暗い夜道を明るくする防犯灯が点された。また、数度にわたる陳情によって、都営住宅前までの関東バスの路線延長を実現させた。」（脇坂 1988 : 66）

ちなみに、先述の小沼丹もこの関前住宅の住人であった。脇坂は、早稲田大学文学部を受験するものの、肺を患っていたため、二次審査の身体検査で不合格となってしまう。そこで、当時早稲田大学で教鞭をとっていた小沼に相談し、学部長に掛け合っ

てもらい、なんとか入学することが出来たという。

空襲で破壊された病院跡に立ちあがった住宅地は、その後八幡町へと名前を変え、現在に至っている。

研究成果と考察 2 : 北区の事例

（1）旧軍用地と学校

次に検討するのは、東京都北区における旧軍用地の学校への転用事例である。

戦後の北区は、戦災で焼失した学校の再建・復旧に取り組まなければならなかったことに加え、新教育制度の一環として新制の区立中学校が設立されることになり、深刻な教室不足に陥る。そこで区は小中学校の新築および増築に取り組んでいくが、中学校の建設用地の確保が課題となった。そこで求められたのが旧軍用地の転用であった（北区史編纂調査会 1996 : 503-505）。

その後、戦後を通して、北区立の中学校では、豊島、清至、富士見、北、赤羽台、十条、堀船の各中学校が旧軍用地を利用して建てられる。また区立小学校でも、八幡、桐ヶ丘、赤羽台東、赤羽台西、梅木の各小学校が、旧軍用地に建てられている（東京都北区役所 1972 : 566）。

（2）軍用地跡の学校

公立学校に加え、私立学校も北区内に所在した旧軍用地に建てられている。たとえば、独立工兵第二十一連隊の跡地には、星美学園が置かれた。当地に当学園が置かれた経緯は、次のようなものであった。

「昭和 21 年のある日、院長より「あなたの軍人の叔父さんにどこか兵舎を貸して頂ける所がないか訪ねてみてください」と言われた平手はなは、叔父から赤羽の第 1 師団工兵隊兵舎を紹介してもらい、担当の方に会い工兵隊兵舎と近衛師団の将校宿舎跡を

【様式 2】

見せて頂きました。とてもよかったのでお願いすると、すぐに財務局に手続きをするため同伴してくださいました。臨時の仮事務所で多勢の行列に並び待つ中、ふと、後ろの方が私たちと同じ番地の借用願いを持たれており、びっくりして胸が高鳴り冷や汗が出、時間が長かったと平手はなが言っています。幸い証明書をいただくことが出来ました。この証明書が星美の始まりになりました」(きたシティ制作室 2013 : 3)。

また陸軍第二造兵廠跡に学園を置いたのは東京家政大学(渡辺学園)である。当学園史は、当地に入って間もない頃の様子を次のように記述している。

「これらの構内は旧軍事施設であるから、すべてその管理は米軍の監視下に置かれ、現在の山田病院正門の位置に守衛所があった。われわれは、これを朝夕出入したのであるが、構内に賠償物資と称する軍時代の中古機械が散財していた関係で、守衛の態度は頗る冷厳であった。白帯帽、白革バンド、自警棒といった守衛が学校内の巡察によくやってきた。その頃、すでに構内の低地には若干の工場が地を画して操業していたから、朝夕は多数の人々の出入があり、守衛はいちいちこれらの人々の監視に当たったわけである。」(渡辺学園八十年史編纂委員会 1962 : 50)

こうしてかつての城北の軍都は、戦後、残された旧軍用地を利用することで、団地と学校が多く所在する空間へと変貌していくのである。

参考文献

榎本昌太郎、1951 年、「東京新名所 グリーン・パーク球場」『旅』1951 年 7 月号。
富士重工業株式会社社史編纂委員会、1984 年、『富士重工業三十年史』。
北区史編纂調査会、1996 年、『北区史 通史

編 近現代』。

北シティ制作室、2013 年、『街に歴史あり 赤羽台に広がる星美学園の 60 年』。

小沼丹著、庄野潤三編、2022 年、『新装版 小さな手袋／珈琲挽き』みすず書房。

沢柳政義、1946 年、『野球場建設の研究』新数学研究社。

東京都北区役所、1972 年、『新修北区史』。

脇坂勇、1988 年、『八幡町ものがたり——ある都営住宅の戦後史』河出書房新社。

渡辺学園八十年史編纂委員会、1962 年、『渡辺学園八十年史(改訂再版)』渡辺学園。